

中国四川省ミニヤコンカ山群 ロンシャン (龍山/Longshan、6,684m) 登山報告

桑 原 郁 美 (札幌北稜クラブ)

はじめに

2025年の秋、上野はるか(34歳)、伊佐見奈穂子(34歳)、鈴木彩子(45歳)、桑原郁美(27歳)の4名で中国四川省の未踏峰登頂に挑戦した。頂上を目指してアタックを続けていたが、標高6,230m地点において、ルート上に越えることのできない大岩が行く手を阻んだ。ルート修正が必要な状況であったものの、残り時間および体力の消耗を考慮した結果、これ以上の前進は困難と判断し、撤退を決断した。最終的に登頂には至らなかったが、本遠征には今後の登山計画に資する経験や知見が得られたと考え、ここに報告する。

・パーティ結成

2024年の春、上野が3人のメンバー(伊佐見、鈴木、桑原)を誘う形でパーティが結成された。上野は、中国遠征を計画したときには妊娠が分かっており、産後の自身を理解し遠征を共にしてくれる仲間として、女性がいいだろうと考えていた。上野は、自身が20代の頃に望んでいたように、世代の異なる女性クライマーと遠征を共にし、その手順や経験を共有したいと考えていた。そのため、やや年齢差のある4人での編成となった。

・山の選定

上野は四川省・雲南省での登山経験が数回あり、計画当初の目標は、四姑娘山の全山縦走であった。しかし2025年の春になり、四姑娘山周辺では幕営が禁止されているという情報を入手、四姑娘山登山の中止を余儀

なくされた。その後、本やAmerican Alpine Journal、インターネット上の記録などを参照し、パーティ内で協議を重ねた結果、次の目標をミニヤコンカ山群の未踏峰であるロンシャン(龍山/Longshan、6,684m)に定めた。中村保氏の『East of the Himalaya Mountain Peak Maps』に掲載された朝日に燃えるピークの写真に強く惹かれたことが主たる理由であり、加えて成都からのアクセスが良い点も魅力であった。

ロンシャンは中国四川省のミニヤコンカ(7,556m)の同稜線上3.5km程度南南東に位置している。アメリカのカイル・デンプスターら3名が2015年2月にロンシャン南稜上の6,500m地点まで到達している。他にも、中国隊2名が2024年10月にロンシャンの1.5km程度南南東に位置する朱山北峰に登頂している。この2つの記録から、ルート・キャンプサイト情報や、それらの写真を、いくつか手に入れた。写真に写ったセラックを見ながら、その崩壊の可能性やアイスクリュウの利用可能性、さらには現地における前進可否について、分からないなりに考えを巡らせ、日本では悶々とした日々を過ごしていた。

登山概要および行動経過

・日程

2025年9月28日～10月25日(出国から帰国まで全28日間、山中22日間)

各自の都合から、1か月以内の短期間でおこなった。ちなみに、中国は30日以内の滞在であればビザ

が不要である（2026年1月現在）

・登山工程

（BC はベースキャンプを示し、C+数字はBC より上部に設けた各キャンプサイトを指す。番号は低標高側から付した）

BC（4,030m）設置後、BC からC1（4,750m）までの日帰り、BC からC3（5,400m）までの3泊4日という2回の順応登山を行い、アタックはBC から8泊9日で行った。順応時に荷揚げやルート偵察を行い、一部の箇所にフィックスロープを残した。アタックの8泊9日の期間中にもルート偵察日を設けて、適宜フィックスロープを残しながら前進した。2回の順応登山の間には1日の休養日を設け、2回目の順応登山後からアタック日までの休養日は2日であった。

・登山ルートの内容

BC ～ C1

短い草の生えた歩きやすい尾根、野生動物の踏み跡が散見された。

C1 ～ C2

氷河に不安定な巨岩が堆積したモレーン C2まではアプローチシューズで行動可能

C2 ～ C3

脆い岩場10ピッチを確保登攀（スタカット）＋雪斜面の歩きを同時登攀（コンテ）

C3 ～ C4

氷河&セラック帯 セラック帯5ピッチをスタカットで抜けると、傾斜が緩み氷河歩きとなる

C4 ～ C5

ロンシャン西面の冰雪壁の登り 適宜スタカットとコンテを切り替える



↑ 南面で脆い下部岩壁



↑ C3からセラック帯を登り出す上野



↑ セラック帯最後の壁、20m



↑ C4から見たC5への登攀ライン

3. 海外登山記録

	日付	行程	宿泊場所
1	9月28日	成田 - 成都（天府国際空港）	ホテル（成都）
2	9月29日	shopping in 成都	ホテル（成都）
3	9月30日	成都 - shimian	ホテル（simian）
4	10月1日	simiann hotel - 林道終点	2950m
5	10月2日	林道終点 - BC入り	BC / 4030m
6	10月3日	休養	BC / 4030m
7	10月4日	BC からC1（4750m）の往復	BC / 4030m
8	10月5日	休養	BC / 4030m
9	10月6日	4260mへ荷物デポ	BC / 4030m
10	10月7日	BC からC1（4750m）	C1 / 4750m
11	10月8日	C1 からC2（5070m）	C2 / 5070m
12	10月9日	C2 からC3（5400m） → C2	C2 / 5070m
13	10月10日	C2 からBCへ下山	BC / 4030m
14	10月11日	休養	BC / 4030m
15	10月12日	休養	BC / 4030m
16	10月13日	1 BC からC2（5070m）	C2 / 5070m
17	10月14日	2 C2 からC3	C2 / 5070m
18	10月15日	3 C3 からルート工作（上野&鈴村）	C3 / 5400m
19	10月16日	4 C3 からC4	C4 / 5820m
20	10月17日	5 C4 からルート工作（桑原&伊佐見&上野）	C4 / 5820m
21	10月18日	6 C4 からC5	C5 / 6230m
22	10月19日	7 C5 からC4へ下山	C4 / 5820m
23	10月20日	8 C4 からC2へ下山	C2 / 5070m
24	10月21日	9 C2 からBCへ下山	BC / 4030m
25	10月22日	休養	BC / 4030m
26	10月23日	BC - Shimian Hotel	ホテル（simian）
27	10月24日	Shimian Hotel - 成都	ホテル（成都）
28	10月25日	成都天府国際機場 - 成田（Tokyo）	-

↑ 中国国内における行動経過表

アタック装備

・荷物の重量：BCから上げた荷物の総量は1人あたり23.5kg。実際には2回に分けて荷物を上げており、8泊9日でアタック出発の際の重量は1人あたり15kgほどだった。C3から上げた荷物は1人あたり13kgであった。

・テント：C2まではモンベルのステラリッジテント2型とESPASEデュオアルティメイトを使用。C3からは重量を重視してESPASEのデュオアルティメイト（フライ無し）とHERITAGEのクロスオーバードームを使用。

・食糧：朝食と夕食はモンベルのリゾッタにスープ系や甘いスティックの粉飲料、ナッツなどを追加した。スープ系の飲み物は洋風よりも味噌汁やお吸い物が高所ではよかった。また脱水症と食欲低下に備えてOS1とポカリスエットを持参し、高所での行動水としても、テント内での水分補給にも使用した。

・ギア類：アタック前半のC3までは岩登りのためカム2セット、ピトン、トラйкаムを持参。後半C3からは偵察で氷河帯からの突破が可能となったため、不要なカムなどをC3にデポした。C3からの氷河、セラック、氷雪壁では状況によってスノーピケットと

アイスクリューを使い分けた。また下降で土囊懸垂を想定していたため、捨て縄は多めに持参した。

・ロープ：50mのダブルロープ4本、50mのセミスタティックロープ1本を使用した。セミスタティックロープはフィックス用であり、落石で痛むリスクを考慮し8.0mmと10.5mmを持参したが、10.5mmは重量的に携行することが厳しく、C1にデポすることになった。

そのほか参考情報

・高所順応

今回は登山期間が短いことから、遠征以前にある程度高所順応を行う必要があることを4人で話していた。上野、鈴村は8月に2週間、インド・ラダックの山に行き6,100mまで登り、桑原は9月に雲南省の山で5,400mのピークに登った。伊佐見は8月にヨーロッパアルプスで4,000mにおける宿泊を何度かしていた。そのほか、上野、鈴村、伊佐見は出国前にミウラドルフィンズで2日間4,000～6,000mに設定された低酸素室で低酸素トレーニングをおこなった。低酸素室での経験は順応に直結するものではな

いが、呼吸法や血中酸素濃度の上げ方などを教わり役立った。

登山の行程を組む作業は中村進著「海外登山 Expedition」、山本正嘉著「登山の生理学とトレーニング学」などを参考に行った。

・費用

本遠征にあたっては、現地のエージェントとして、Masherbrum社のDonald Tang氏に多大なるご支援をいただいた。また、日本山岳・スポーツクライミング協会をはじめ、複数の知人・友人の皆様からご支援を賜った。

今山行を振り返って

・パーティ構成の評価

本遠征は、私自身にとって初めての高所登山であったが、今回のパーティ構成は全体として行動しやすく、無理のない形で山行を進めることができた。

BCにはコックはいなかったものの、他のメンバーの料理のレベルが非常に高く、限られた環境下においても食事は大変充実しており、行動の継続に良い影響を与えていた。また、メンバー同士の気配りも

行き届いており、私が下部岩壁の登攀中に落石により負傷した際にも、適切な対処をしていただいた。行動ペースについても無理がなく、意識的にペースを抑えることで余裕のある安定した



↑クオリティの高いBC食

■支出	金額(1人分)
エージェント費用(ポーター/リエゾン/ホテル/送迎/追加荷揚げ/手数料)	343,000
航空券(往復)	90,000
食費(BC/アタック/行動食)	28,000
通信費(インリーチサブスク2台/天気予報サブスク)	8,000
装備購入費	116,000
高所順応(低酸素室利用)	35,000
失ったギア(スリング/新規購入ロープ等)	36,000
雑貨(BCでの生活用品、医療品、赤布等のアタック時小物)	13,000
合計	669,000

■収入	金額(1人分)
JMSCA海外登山支援金	73,000
個人からの支援金	18,000
合計	90,000

■1人当たりの負担額	579,000
------------	---------

3. 海外登山記録

行動が可能となり、高山病を発症するリスクを抑えることにもつながった。

人数の面では、4人パーティであったため、特にロープを使用する場面では待ち時間が生じることもあった。しかしその一方で、体調不良者が出た場合にも、他のメンバーが行動の選択肢を保持できるという利点があり、この点においては4人構成のメリットが生かされたといえる。

・情報の限られた未踏峰での登山経験

本遠征のルートは、いまだ登頂には至っていないものの、過去に6,500m地点まで到達した記録があるルートであった。しかし、得られる情報は限られており、加えて氷河状態の変化などにより、ルート状況は年々変化していると考えられたため、全体としてルートの見通しは立てにくかった。

特にC3からC4にかけての区間は、本ルートの中でも最も判断が難しいパートであり、セラック帯を安全に通過できるかどうかは、実際にセラックの迷路に入り込まなければ通過可否を判断できない状況であった。そのため、多くのギアを携行する必要性が生じ、ルート確認のための偵察行動も増えた結果、アタックに要する日数は当初の想定よりも増加した。

一方で、登山可能な日程には限りがあったため、BCにおいて十分な休養日を確保することができず、疲労が完全に回復しないまま、8泊9日のアタックに入る形となった。これらの要因による疲労の蓄積は、パーティ全体の行動に少なからず影響を与えていると考えている。改めて、情報の限られた山における登山の難しさを、身をもって実感する山行となった。

上野さんから誘われたことをきっかけに始まった本遠征であったが、初めての経験ばかりで、分からないことも多く、不安は尽きなかった。エージェンツ探しに始まり、登山許可の取得、必要装備の選定、具体的な登山行程の検討など、自分一人では到底成し得ない準備ばかりであり、他の3人の力に支えられて進めることができた。なかでも、高所登山および中国渡航の経験を持つ上野から多くの助言を受けながら準備を進められたことは、大きな支えとなった。

また、中国国内に到着してからも、装備や食料の買い出し、ポーターに預けるためのパッキングなど、慌ただしい日々が続いたが、これらについては上野の妹さんが大いに力を貸してくださった。



↑ 迷路さながらのセラック帯

高所遠征登山の準備段階から登山全体に至るまで、仲間とともに考え、行動するなかで、多くのことを学ぶことができた。高所遠征登山への挑戦は、時間的にも経済的にも負担が大きく、容易に踏み出せるものではない。そのような中で、一步を踏み出す機会を与えてくれた仲間感謝するとともに、本遠征で得られた経験を、今後の自身の登山に生かしていきたい。